



クリスマスの冒険



(習作) クリスマスの冒険 (子供のために・・・したがっておとなのためにも)

君たちが眠っている時、脳だけがふと目を覚ますと、脳は空想や思い出にふけり始める。何しろ脳がひとりでできることと云ったらそんなことだけだから。そしてそれが夢の正体です。

だから眠っている時にみなさんが見る夢は空想と記憶がひとりで織り成されて生まれてきます。それと同じようにぼくのこの話もぼくの記憶と空想が編み出したものです。ただこの話はもうずっと前のことですから、ぼくの記憶も曖昧で思いで話が何度も語られ古くなるにつれおとぎ話じみてくるようにこの話ももうそんな趣きのする古さになってしまい、ぼくにとってさえ記憶の箇所と空想の箇所を正確に区別することが難しくなっています。

瀬戸内海の沿岸にはたくさんの町や村があり、そこに住む人々は四季を通じて穏やかな気候に恵まれています。冬には中国山脈が寒い北風を防いでくれて、交通がストップするような大雪に見舞われることもありませんし、台風シーズンにも四国山脈が台風を弱めてくれるし、大地震もこの地方の人々の記憶にはありません。

ぼくとマサが育った広島県の三原という町もそのような平和な町の一つです。三原は海岸沿いを除くとまわりを山々に囲まれた小さな平野です。だからぼくらは小さい頃から年上の友達に連れられていろんな山に遊びに行きました。

春には山はたくさんの色とりどりの花に満ち、山道ですれ違う女の子たちはみんな手に何本かの花を持っています。夏には網とかごを持ってセミを採りに行き、秋には笛ややじろべえ、駒を作るためのドングリやいろんな食べられる木の実を採りに行きました。だから四季によって様々に変化する山々はぼくらにとって一番の遊び場でした。

でも冬はぼくたちは家の中にいることが多くなり、山で集めたたくさんのドングリを一つずつ釘で中の実をえぐり出して笛にしたり、爪楊枝を突っ込んでこまにしたドングリをこたつのテーブルの上で回して遊びます。その頃山々はその彼方から町にめがけてビュービュー吹いてくる強い冷たい風を体で受けて弱めながらも次第にその肌はあらわにされ、荒れていきます。しかしある朝、ぼくたちはその山々がまぶしいくらいの白さで輝いているのを発見して驚き、その雪姿に畏敬の念すら覚えるのでした。

主人公はナンキン（どういうわけか、これがぼくのあだ名だった）とマサ。同じ年のぼくらは幼稚園に入る前からの仲良しでその頃から共に冒険ずきで、年齢に応じた冒険だけでなく、年長の者らにつられて鉄橋を渡ったりするなど度の過ぎる冒険などもしました。

そしてこのぼくとマサの冒険もそのような木枯らしの吹く冬の山での体験によるものです。

それはクリスマスの前日のこと、つまり12月24日のことです。ぼくとマサは5年生になっていました。その日、昼まで学校にいてそれから二人で家に帰りながらクリスマスの話をしていました。

すると一台の宣伝カーがスピーカーでジングルベルの音楽を鳴らし、「ヌタヤ、ヌタヤのクリスマス・バーゲンセール。皆様ぜひお越し下さい」とがなり立てながらのろのろ運転でやってきました。

見ると、運転手はサンタクロースの服装をして、白いあごひげをつけた人でした。そして車の後ろの方にはたくさんの子供たちが走って追いかけてきています。その中にジュンベエとフジョーがいました。そして彼らはぼくとマサを見つけると、「おかしがもらえるぞー」と叫んだ。見ると彼らの手にはお菓子が入っているらしい白い紙ぶくろが握られていました。それでぼくたちも急いでその宣伝カーを追いかけてきました。しばらくして車は公園の近くで止まりました。サンタクロースが降りてきて、後ろの荷台に上がり、そこにおいてあった布ぶくろから紙ぶくろを取り出してぼくらの方に投げ始めました。ぼくたちは必死になって手を伸ばして「こっち、こっち」と叫んだ。運のいい者たちはもう二つも三つも取っているのに、ぼくはなかなかキャッチできなかった。そのあいだスピーカーはずっとヌタヤのクリスマスバーゲンセールを宣伝していた。公園で遊んでいた女の子たちもぼくらに混じっていました。しばらくするとサンタは「もこれでおしまい」と言ってまた車の中にもどっていった。車は出発した。ジングルベルの音楽が再び鳴り始めた。そしてぼくらはまた追いかけて走った。ほとんどの子供たちはもうずっと前からこの宣伝カーのあとを追いかけていたようだった。汗が出始めた。ぼくらはハアハアと口を開けて息をしながら走った。

次に止ったところは神社のそばだった。ぼくはこんどこそは取ってやるぞと意気込んで前の方に来て待った。白い紙袋はほいほいと青い空に投げ上げられぼくの頭の上を飛んでいく。後ろで子供たちの歓声上がる。ぼくはジャンプしてつかもうとするがどれもぼくの手にかすりもしない。サンタはそんなぼくを見て哀れんでくれたのか一つ軽くこっちへ投げた。「あっ、しめた」とぼくはそれを受けとめようと両手を構えた。すると、左側からひよいと手が伸びてきて、その紙袋はその手にキャッチされてしまった。後ろの方でだれかが、「痛いの一」と言ったかと思うと、つかみあいのけんかが始まった。宣伝カーがエンジンの音を立て始め、車は再び動き出した。ぼくたちはまた追いかけた。けんかをしていた三四人もあわててとっくみあいをやめた。

「おどれ一、おぼえとけ一よ一、あとでなかしちやるけ一の一」

「おどくさ一、おみゃーなんかへよ」そう言いながらも彼らはすでに車を追って走り始めていた。

ぼくはまだ一つも取っていなかった。マサを見るとジャンパーのポケットが両方とも膨れていた。二つ取っているようだった。ぼくはマサに近づいて走った。彼はぼくがまだ一つも取ってないのを見るとポケットから一袋出してぼくに「やら一」といってさし出した。「サンキュー。次のとこでわいが取ったら返してやるけえ」とぼくは荒い呼吸をしながら言った。

結局次のところでもぼくは取れなかった。その代わりマサはまた一つつかんでいた。ぼくたちはもうそこまでにして引き上げることにした。昼ご飯をまだ食べていなかったので腹ぺこになっていたのだ。紙袋の中にはチョコレートやクッキーやキャラメルなどが入っていた。二人は家に帰ろうとして、随分遠くまで来てしまっていたことに初めて気づいた。ジュンベエやフジョーはもういなくなっていた。

ぼくがクリスマスツリーは作ったかあ？とマサに聞くと、いんや作つとらんや、ナンキンとこはあ？と聞いたので、わいとこも作つとらん、飾りは去年のクリスマスのんがあるんじゃけど、もみの木がなあけえ作ってなあやあ、するとマサもわいとこもよう、飾りはあるけどもみの木がなあけのう、と言うのでした。

これは三原の男の子の話し方をそのまま書いたのでおかしな言葉がたくさんでてきましたが、意味はわかったでしょう。「いんや」は「うんにゃ」とも言ったけど、「いいや」とか「ううん」ということで、「わい」は「ぼく」のことです。三原以外の人にはあまりきれいに聞こえないでしょうから、以下はもっと標準語に近づけて書くことにしましょう。

それでぼくたちは、さっそくその日どこかの山にもみの木を取りに行こうと話が決まりました。その夜はもうクリスマスイブだというのに唐突なことを思いついたものです。

そうなるに急いで家に帰って、昼ご飯も急いで食べて、さっそく自転車で二人は出発しました。ぼくたちはもみの木を切るためのナイフをポケットに入れ、お菓子のつまった紙ぶくろをポケットにつっこみました。

自転車はスピードを出し、勢いよく山の方に向かいました。風は冷たかったけどぼくたちはジャンパーを着、野球帽をかぶりマフラーを巻き、手袋をしていましたので平気でした。

山のふもとに着くと、自転車を置いて、山道を登っていきました。空気は冷たかったけど空はとてもよく晴れていました。しばらく登ると汗が出てきたのでマフラーをはずし、ジャンパーのチャックを下までおろしました。時折太陽がゆっくりと流れている雲の中に隠れると、急に寒さが襲ってきました。

やがてもみの木らしいのがポツンポツンとはえている所に来ました。もっと登って行くと、その木はだんだんまわりに増えてきました。でも気に入ったもみの木はなかなか見つかりません。

本当のことを言うとぼくたちはもみの木を取るというだけでなく山にはいつも冒険のために来っていたので、この時も、簡単にもみの木を切って帰るよりは、もっといろんな所を探検してみたいという気持ちだったので、もみの木もじっくり探していいのを見つけようと思ったのです。

それで、ぼくたちは山道からはずれて小さな谷におりて、その小さな谷川に沿ってもっと登っていきました。ぼくたちは迷子にならないように谷に入った所からナイフで木にしるしをつけながら進んで行きました。そうしたら戻る時その木のキズを見つけながら引き返せばいいわけです。

谷の底の小川の水はとても冷たかったので、4秒以上手をつけておくことはできませんでした

ので、咽が乾いても少ししか飲めませんでした。

冬なので動物たちはもう冬眠していたのでしょうか、ぼくたちは動物には一匹も出会いませんでした。でも時々鳥の鳴き声を聞いたような記憶があります。

ぼくたちはお腹が空いてきたので、ビスケットやチョコレートを少しずつ食べながら谷を登っていきました。登るにつれて谷川は岩や倒れた木々が多くなり登りにくくなってきます。

ぼくはマサが食べるのと同じものをまねして食べました。マサがビスケットを出して食べるとぼくもビスケットを見つけ出して食べ、マサがチョコレートを半分だけ食べるとぼくもチョコレートをさがし出して半分だけ食べて袋に戻しました。

谷川をどんどん登ってゆくと、谷は少しずつ険しくなり、岩も多くなり、おまけに大きな木が倒れて行く手を遮っていたりして歩くのが難しくなってきました。そしてやがて谷は両側から突きでた木々に覆われてトンネルのようになってきました。

「マサ、もうこのへんでひきかえそうか」ぼくが言うと、

「もうちょっといってみよう、なにかたきのようなおとがしているからそこまでいってみようや、なんきん」そうマサがいったので耳をすませるとたしかに水がおちている音がずっと上のほうでしていました。

ぼくたちはその音をめざしてのぼりました。しばらく行くとぼくらは薄くらいトンネルのような谷から急に明るい広々とした場所に出ました。そこには小さな楕円形の池があって、その上の方に7、8メートルの高さの滝が流れ落ちていました。しぶきは太陽光線に照らされてきらきらと光っています。そしてかすかに虹が池の上に立っていました。

ぼくもまさもへとへとに疲れていたので、その池のほとりの平らの岩の上にこしかけて休むことにしました。しかし座るとすぐに尻が冷たくなってくるので、マフラーを座布団にしてその上に座らなくてははいけませんでした。

いけのみずはとてもすみきっていて、砂底がきれいにみえました。そしてさざなみはそのなめらかな砂底に太陽光線によってまぶしいくらいに光った線として投影され、いろんな方向にたわむ

れるようにゆれうごいていました。もし水がつめたくなかったらぼくらはもちろんその中にはいって泳いでいたでしょう。あたりはとても神秘的なようすだったので、ぼくらはおとぎの国にいるような気持でした。

ぼくたちはそこで残っていたおかしをぜんぶ食べました。しばらくじっとしていると寒くなってきたのでジャンパーのチャックを首まで引き上げ手袋をしました。漂ってくる水しぶきのせいで空気はとても冷たくじっとしていると体が自然に震えてきます。

いつのまにか陽は西に傾いてかすかな虹も消えてしまった時ぼくらは立ち上がって引き返すことにしました。

冬は暗くなるのが早いのでぼくらは急いで谷を下っていきました。

トンネルのようになったところをすぎてでてみると、太陽は谷の左側にもう見えなくなっていました。空はまだ青く明るかったけど、谷の中ではもう夕闇がこくなりはいじめていました。

谷間は山の陰になっていて、他の場所よりは早く暗くなってしまいます。他のところが夕焼けに照らされてまだ明るい時も谷間はもう夕闇に覆われてしまうのです。

もちろん時計は持っていなかったので何時頃だったのかわかりませんが、きっと4時になっていたのではないかと思います。冬は早く暗くなるので、ぼくたちは急いで谷を降りはじめました。おりるのは登るのより簡単のようですが、岩がたくさんひしめきかきさなっている谷ではむしろむつかしいのです。おまけにあたりがだんだんうす暗くなってくるのでぼくたちはとても心細くなってきて急いだためかえって足を滑らせたりしりもちをついたり冷たい水に足を突っ込んだりしてしまいました。いくら探険好きの僕らもこの時ばかりはあわてました。もうモミの木どころじゃありません。ナイフでつけた木のキズを見つけるのも暗くてむつかしくなってきました。谷をおりるのは木のキズがなくても谷川に沿っておりればいいのですが、どこから谷に入ったのかを知るためにそれを印した木のキズを見つけなくてははいけません。

ぼくらはとうとう木につけられたキズを見つけることができなくなってしまいました。ぼくとマサは泣きそうな声でどうしようかと話し合いました。冬なのでこのままでは二人とも凍え死んでしまいます。空はいつのまにか曇ってきていて星は見えません。月は時々雲の間から弱い光を谷に注ぐくらいです。空を見上げるたびにぼくは自分たちが大きな地割れの中において、空が暗くなっていくと共にその割れ目はゆっくりと閉じているのだ、というような気がしてくるのでした。

そしてマサが言いました。「このままこの谷をずっとおりて行こうよ、そうしたらこの山から出られるはずだから」

「でもどこに出るかわからんよ」ぼくは言いました。「もし山から出られても知らない所に出
てしまうかも知れないよ。もっとよく木のキズを探してこの谷に入った所を見つけようよ。そし
たらよく知っている山道に戻ることができるんだから」

「でもこんなに暗くではもう見つかりっこないよ、ナンキン」

「うん・・・でも月の光で見つけられるかも知れないよ」

その時、月は半月でした。

「それじゃあこうしよう。ぼくは谷をおりて行ってどこに出るか調べてくる。その間ナンキン
はこのあたりで最後の木のキズを探しててよ」ぼくらはそうすることにしました。

「合図は口笛をピーピーピーと三回だよ」ぼくはマサに口笛を三回吹いてみせました。「そし
て谷をおりたらまたこっちに戻ってきて、ぼくにどこに出ているか知らせてくれよね」

「うん、それからナンキンはぼくがここに戻ってくるまで木のキズを見つけても絶対にこの谷
から出ないで待っててね」

「うん」ぼくらはそこで別れて、手分けをして脱出口を探すことにしました。

ぼくはそこに残って木を一本ずつ調べました。でも暗くてちっともわかりません。時々顔を見せる月の光だけがたよりです。そしてひとりになるととてもとても心細くなってきます。風で木の枝が揺れてカサカサと音がするだけでビクツとしてふるえ心臓がドキドキしてしまいます。

マサはどうしているだろう。いっしょに行けばよかった。ぼくはピーピーピーと口笛を三回吹いてみました。でも返事の口笛は聞こえてきません。もうマサはだいぶ下のほうに行っているに違いありません。ぼくはもうとても心細くて涙がでてきました。きっとお母さんやお父さんは心配しているだろう。今夜はクリスマスイブだというのに。

ぼくは心細くてたまらなくマサにすぐにでも会いたくなかったので谷をおりはじめました。細い谷で岩や大きな石がたくさんあるので、あせってもなかなかうまく進めません。何度も冷たい水の中に足を突っ込んでしまいました。それでもピーピーピー、ピーピーピーとぼくは三回ずつ何度も口笛を吹きながらおりて行きました。

「ガサガサ」ふいに下のほうから物音がしました。ぼくはドキリとしました。でもマサかも知れないぞと思い、勇気をふりしぼって、でもふるえながら口笛を三回吹きました。音はしかしかすれてヒューヒューヒューと口笛にはなりません。するとでも物音がしたほうからピーピーピーと三回口笛が聞こえてきました。

「マサー？ 下の方はどうだった？ 知ってる所に出た？」

「いいや、谷はだんだん大きくなって行って大きな湖に出るんだよ。そしてそこからひきかえしてきた。湖の岸にそって行けばどこか知っている所にたどりつけるかも知れないけど・・・」

「じゃあ、その湖まで行こうよ、上の方はもうだめだよ、あそこは暗くて怖いばかりだよ」

ぼくたちはそこでいっしょに谷をおりて行って、みずうみの岸にそってこの山からでることにしました。すこしでも早く山から出て、人の住んでいる所にたどりついたかったのです。マサが先になっておりて行きました。

谷川はマサが言ったようにだんだん広くなって歩きやすくなってきました。それでも気をつけて歩かないと、岩につまづいてけがをしまいます。ぼくはもうすでに左足のすねをすりむいてしまっていました。とてもヒリヒリしていましたが、今はそれどころではないのです。

マサも足にけがをしていました。少しちんばをひいていたので、ぼくは足はどうしたんだ？と聞きました。

マサは「おりる時、ぬれた石の上で滑ってこけたんだ。その時手もすりむいてしまったよ」と言いました。

そこで、ぼくらは少し休むことにしてマサの足を見ってみることにしました。ズボンをめくってみると血が出ていました。それを見るとさすがのマサもアーンアーンと泣きはじめました。ぼくはハンカチを出してそこをふいてやりマサのハンカチでそこを包帯の代わりに巻いてやりました。

さあ、もう出発しよう、もう少しで湖に出られるはずだよ」マサは元気をとりもどして歩き始めました。ぼくはこんどはマサの前に行くことにしました。いつのまにか月は雲の間から顔を出して、谷を明るくしてぼくらに味方してくれていました。

谷はしだいに広くなっていき、細い道もはじまったので歩きやすくなりました。でもマサが足のけがでちんばをひいていたので、ぼくらはあまり速くは進めませんでした。しかしわずかずつ右に曲がっていた谷川が急に広くなり大きく左に曲がったかとおもうとぼくらはついに大きな湖に出ました。

その湖は丸い形をしているようで、ぼくたちの学校のグラウンドよりもっと大きく、その真ん中に小さな島がありそこに3、4本の木が立っていました。そして湖の向こうは森のようでした。二人ともこの湖は今までに来たことがありませんでしたので、どちらに行けばいいのかわかりません。でもぼくらは川の左岸にいたのでいっしょに左の方に回ってみることにしました。

どこかにここから出られる道があるに違いありません。あの森の向こうはひよっとしたらぼくらの町かも知れない。そういう希望を持って僕らは湖のほとりの道を進みました。5分くらい歩いたでしょうか、道は急に曲がって湖から離れてやぶの中に入っていました。また湖の方にもどってくるんだらうと思ってぼくたちはおそろおそろ月明かりだけの細い道をたどりました。するとすぐに小さな小屋がありました。あたりには人の気配はまったくなく小屋の中は真っ暗でした。手探りで中に入って調べてみました。マサが何か長い木の棒を見つけたと言って外に出て月の光で見るとそれはボートを漕ぐオールでした。もう一度入ってぼくは魚をすくうアミと釣り竿を見つけました。

「きつとこの小屋はこの湖で魚を釣る人が使っている小屋だよ、マサ。オールがあったということはこの近くにボートがあるにちがいないよ」

「うん、きつとそうだ。ナンキン、さっきのところに戻ってボートをさがそう」

ぼくたちはさっそく湖の方にもどって、道でない所を草木を押し分けながら進んでボートはないかときがしました。するとしばらくして草木がきれいに刈り取られた空き地に出て、岸の方を見ると、たしかに小さなボートが杭にロープでつながれてありました。ぼくたちは二人でそのロープを引っ張ってボートを岸に寄せました。小さなボートでしたが、ぼくたちは軽かったので二人とも乗れそうでした。

「よし、ここからはこのボートで行こう、そしたらマサももうそんなにちんばを引いて歩かなくてすむ」そう言うとぼくは小屋に引き返してもういっぽんあるはずのオールをさがしました。しばらくしてそれは思ったとおりに見つかってボートの所に戻ってくるとマサが湖の向こう側にある森の方を指差し、声をひそめて言いました。

「ナンキン、よく見て・・・あそこに小さな明かりが見える。ね、ほらあの森の中・・・小さいけどキラキラ光ってる」

ぼくもマサの指差す方をよく見てみました。するとたしかに小さな明かりが森の中に見えました。

「きっとあそこに人がいるにちがいない、あそこに行ってみようよ、そうすればぼくたちの町に帰る道がわかるかもしれないよ」とマサが言いました。

「うん、そうしよう」

ぼくはマサを先にボートに乗せ、それからオールを一本ずつマサに渡し、杭からロープを外して、ぼくもボートに乗りこみました。その時、岸を足で思いっきり蹴って乗ったのでボートはスーと岸を離れました。

手前の方の舟板に座ったマサが最初にこぎました。ヒューと冷たい風が吹くとぼくたちはカメのように首をちぢめてふるえました。

「寒いねえ」ぼくは両手をジャンパーのポケットに突っ込んでガタガタふるえながら言いました。

「うん、でもボートを漕いでるとそんなに寒くないよ。じっとしてるからだよ。かわってあげようか、ぼくも疲れてきたから」

「うん、かわろう、かわろう」ぼくらはボートのバランスをとりながら注意深く位置を変えました。そしてぼくは寒かったのでヨイショツ、ヨイショツと声を出しながら勢いよく漕ぎました。ちょうどボートは湖の真ん中あたりにある小さな島に近づいていました。あまり勢いよく漕いだのでボートは揺れて今にもひっくりかえりそうになりました。

「おい、もっとゆっくりこげえ！ナンキ！」

「グシーン！」

マサがナンキンといおうとした時、ボートは突然何かにぶつかり大きな音を立てて止りました。ぼくはオールを握ったまま、うしろにひっくりかえり、マサは前にのめってぼくの上に倒れてきました。

「どうしたんな？」

「何かにぶつかったらしいよ」

ぼくたちは横になったまま首をもたげて前方を見ました。

「おかしいなあ、あの島ならもっとむこうだよ、ほら」

「うん、じゃあ何にぶつかったんだろう？」ぼくらは起き上がってボートのすぐ前をおそるおそるのぞいてみました。

「たいへんだ！見てん、氷よー、氷にぶつかってしまったんだ」ぼくはひびの入った氷をゆびさして言いました。

「本当だ。ここから先は湖は氷ってしまってるよ。どうしよう」

「よし、それじゃあここからは氷の上を歩いて行こうよ」ぼくはそう言うと、ボートからおりて氷の上へのろうとしました。

「まって！ナンキンあぶないよ！このあたりの氷はまだ薄くてあぶないはずだよ。氷が割れて

冷たい水の中に落ちてしまったら、いくら上手に泳げたって、凍え死んじゃうからね。だからあの島のあたりまでは氷を割りながら進もう」

ぼくは、たしかにマサの言ったことは正しいと思いました。ぼくとマサとでは、学校の成績はぼくのほうがずっと良かったのですが、こういう時になるとマサのほうがかしこいことを言うのでした。

ぼくたちはそこで氷をオールで割りながら少しずつボートを進めていきました。ハアハアとはく息は月の光に照らされて真っ白です。手がとても疲れましたが、なんとか島の近く10メートルくらいまで進めてきました。そのあたりまでくると氷はとても厚くなってなかなか割れません。そればかりかせっかく氷を割ってボートを進めて来た水面にまた氷が張り始め、まごまごしているととうとうボートに氷が張りついてしまい、ボートはすぐにぼくらが動いてもゆれもしなくなってしまうました。

「よーし、このくらいだったらもう氷の上を歩いても大丈夫だよ」マサは先がボロボロになったオールでゴツンゴツンと氷を打って確かめながら言いました。

「うん、それじゃあボートからおりよう」そこは湖の真ん中あたりです。ぼくはまだチラチラと明かりの見えてくる森の方を見ながら言いました。「でもあの森の岸あたりまで氷がずっとつづいていてくれるといいけどね」

「そうだね・・・でもナンキン、あの森に近づいていくほどだんだん寒くなってきてるような気がしない？」

「うん」ぼくもたしかにそんな気がしていました。冷たい風はずっとその森の方から吹いてき

ていましたし「・・・でもきっとそれは夜が遅くなってきているから寒くなっているのさ」ぼくはおそるおそるボートから氷の上におりながら言いました。

「うん、・・・もし氷があそこまでつづいてなかったら、このボートにまた引き返してくるし
かしかたがないよ」マサも静かにボートをおりました。

「でももうこのボートは氷が張りついてしまっているから氷が解けるまで1ミリだって動かないよ」

「うん、まあとにかくあの森の方に行ってみることだよ」

二人がいったんに氷の上を歩くと危ないので一人ずつ行くことにしました。ぼくが先に片手にオールを持って抜き足差し足でまず10メートルくらい先にある島まで行きました。オールを持ったのは何のためだったか今は忘れたが、おそらく冒険にはつきものの武器のつもりだったのでしょう。

島はだいたい直径が6、7メートルくらいの大きさと、モミの木が3、4本はえていました。マサがすぐにやってきました。ぼくらはそのまわりを一周しました。氷がどこまで続いているか調べるために石を投げてみようと思いましたが一つもありませんでした。そしてもとの所に戻ってきた時、フワフワと細かい雪が落ちてきました。

「たいへんだナンキン、雪が降ってきたよ、さあ急ごう」

ぼくらは重いオールをそこに捨てて、森の明かりをめざして足早に歩きました。氷の上は滑って行けるので楽でした。でもすぐに足の裏がとても冷たくなってきました。

運のいいことに氷は森の岸辺まで続いていてくれました。それは月の光に照らされて雪が氷の上をずっと森の所まで白く積もり始めていたからわかりました。

しかし雪はしだいにうんと降りだし、冷たい風も強く吹き始めました。

「ふぶきになりそうだ！急いであの明かりのともっているところに行こう」マサは走りだしながら言いました。

しかしすぐに明かりは見えなくなってしまいました。

マサはちんばをひいていましたが、二人ともできるだけ速く走りました。ぼくらは泣きそうになりながらも歯をくいしばって走りました。

マサがツルツと滑って倒れそのまま8メートルぐらい滑っていきました。

「おかあさーん、おかあさーん」ぼくらはとうとう泣き始めました。そしてぼくは今でも覚えています、あの時、目のすぐ下からほほにかけて涙が凍ってかたくなっていたのを。こんなのは

もちろん生まれて初めてでした。

「ナンキン、ぼくはもう歩けそうにないや、足がいたくてだめだよ」氷の上に座ったままマサは足をいたそうに抱えて言いました。

「何を言うんだ、マサ、がんばってもうすぐじゃないか」

ぼくはマサの手を引き、肩に巻いて歩きました。雪はようしゃなく降っていました。ぼくたちはハトハトに疲れていましたが、やっとのことで氷の湖から出ることができました。

森の中に入ると風は弱くなったものの、積もった雪でとても歩きにくくなりました。しかし一度見えなくなっていた光が再び森の奥の方に現れました。ぼくらは月の光の落ちない森の暗闇の中をその光を目指して一心に進みました。

「明かりはあそこにもあるよ。そら、ちらちらしている」マサが指さして言いました。

「あっ、あっちにもある、ほら、あの高い木の上の方にも・・・」その光はぼくがちょうどそちらを見た時ともったようでした。

ぼくらが森の奥へ進んでいけば行くほど明かりがあちこちにたくさん見えてきました。それらはすぐ近くにあるように見えたり星のように遙か彼方で光っているようにも見えるのでした。

「ナンキン、あれはロウソクだよ！あれを見て、ロウソクの火だ！」マサがぼくの肩に掛けていた手を揺すり、反対の手で指さしながら叫んだ。

ぼくらは立ちつくしました。明かりだと思っていたのはロウソクの火でした。モミの木の大きな枝に立てられています。その時、雲の間から月が現れたのか森が急に明るくなり地面を覆っていた雪も輝き始めました。

「ああっ」ぼくとマサはすっとなきょうな声を上げました。

赤や黄、緑色のいろんな色をした大小のロウソクがモミの木の上で燃えているばかりでなく、驚いたことにモミの木々には赤いリボン、銀や金色の星、ベル、テープや玉、人形や小さな家の飾りなどがたくさんたくさん飾ってあったのです。これらは近くのロウソクのオレンジ色の光を受けてキラキラととてもきれいで、それに真っ白な雪が綿のようにのっているのです。まるでここはクリスマスツリーの森です。ぼくらはこの森の中を行けばきっとだれかに会えると思い進んで行きました。

「ほら、十字架もたくさん飾ってある」マサが指さしました。

「こんなすごいクリスマスツリー見たことないよねえ」

「うん、でもいったいだれがこんなにたくさん飾りつけをしたんだろう」

ロウソクの長さから判断して火をともしてからまだあまり時間がたっていないはずでした。だ

から火をともした人はまだそんなに遠くへは行っていないはずです。しかしまた不思議なことに雪の上に残っているはずの足跡はどこにもないのでした。

「はっ！あれっ？」ぼくは息をのみました。「あの人形見て、花火のようにぴかぴか光ってる」ぼくは一本のモミの木の上の方を左手で指差し、右手でマサの肩をゆすりながら言いました。

「しっ、あれは人形じゃないよ」マサは声をおしこらし、でもとても興奮した声で言いました。「だって動いている。あっ、羽で飛んでる。きっとクリスマスツリーの妖精だよ。飾り付けをしてるんだ。ほら、ロウソクに火をつけた。」

「ほんとだ・・・かわいいね」ぼくがそう言った時、その小さな妖精は、ぼくたちに気づいたらしく、驚いてツリーの枝から蝶のように舞い上がり、あわてて飛び去ります。



ぼくらは疲れた足を引きずりながらも追いかけていきました。でも花畑の中で蝶をすぐに見失ってしまうように、この妖精もクリスマスツリーのデコレーションの中に紛れて見えなくなりました。追うのをあきらめたとき、ぼくらは3、4メートルくらいの幅のある道のそばに来て

いました。道の向こう側もやはりクリスマスツリーの森が続いています。

ぼくたちはその少し低くなった所を通っている道までおりて行ってそれを右の方に進みました。月がそちらの方に傾いていたからです。道を明るくするためでしょう、道の両側のモミの木には他の木よりもたくさんのロウソクが燃えています。月の光を浴びて白く輝く雪でふっくらと舗装されたこの道は、車が通るには狭すぎるけど、遊歩道としては広すぎるというものでした。

5分くらい歩いた頃だったでしょうか、どこからか鈴のような音が聞こえてきます。とてもきれいに澄んだ音です。そしてそれはしだいにこちらに近づいて来てるようでした。シャンシャンシャンシャン・・・

「あの音は何だろう、この道をやって来てるよ」ぼくは立ち止まって言いました。

「うん、だれかがこっちに来てる、あの大きなモミの木の後に行って隠れよう」

ぼくらは少し道から外れたところに立っている大きなモミの木の方に急いで行きました。マサはその時とても足が痛そうで見ているとみじめでした。

雪はまだ降って積もっていきます。ぼくとマサの野球帽は雪ですっかり白くなっています。

「ナンキン、もし悪そうな人でなかったら二人で大きな声を出して止めるんだよ」そう言ったマサの鼻の頭にも雪がのっていました。

シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン

「そら、もうすぐここを通るぞ」ぼくは寒さところわさで少しふるえながら言いました。マサはじっと道の方を見えています。

シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン
ン シャン シャン

ブルルル

突然、動物の発する荒い鼻息が聞こえました。ぼくはむしゃぶるいしました。そしてそれは止まらなくなりました。

シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン シャン
ン シャン シャン

「!!!」ぼくは心の中で叫びました。

最初に見えたのは雪道を照らす赤い光でした。それからたくさんの方、そしてそれらに引かれたソリ。しかし一番ぼくが驚いたのはソリの上に座って手綱を握っている見覚えのある太った人です。白でふちどられた赤い帽子に赤いマント、そして白いふっくらとしたひげ。あの宣伝カーで子供たちにお菓子を投げしてくれたサンタみたいです。でっかい体はソリが揺れるにつ

れボールのように弾んでいます。うしろに白い袋もあります。しかしそれは空っぽのようでした。

「サンタクロースだ！」マサが声を上げました。

「待ってー！待ってー！」ぼくはモミの木の後から飛び出してソリを追いかけました。

「おじさん、待ってー！」ぼくはあらんかぎりの声をふりしぼって叫びました。「待ってー、待ってー！」

するとそのソリに乗った人はぼくの方を振り返って、びっくりしたような顔をして、ソリを止めました。そしていそいでおりて、ぼくの方に歩み寄ってきました。

わたがしのようなふっくらとしろい口ひげの間からはき出される白い息はまるで口ひげがちぎれて飛びちっているように見えました。ぼくは急にめまいがしてきてふらふらとしました。へとへとに疲れているところに大声を張り上げたせいか、それともサンタクロースを目の前に見たせいか、おそらく両方のせいでしょう。今にも倒れるという時サンタはぼくを抱きかかえてくれました。

「どうしたのだね、君たち、こんなところで」

「ぼくたちはこの森に迷い込んでしまったのです。町に帰りたいんだけど方向がわからないんです・・・」マサがそう言うのを聞きながらぼくは気を失っていきました。

*

体が激しく揺り動かされ、ぼくは目を覚ましました。まっ暗やみです。とたんに体が宙に浮いたようになりふわりとしたかと思うとドシンと落ちました。ぼくはびっくりしてもがきました。するとすぐそばにだれかいてぶつかりました。

「ナンキン気がついたか、だじょうぶか？」マサの声です。

またもや体が宙に浮き、ドシンと落ちました。

「ぼくらはサンタさんのソリの上にいるんだよ。今、サンタさんの家に向かっているんだ。サンタさんはクリスマスプレゼントを配っていて、袋が空っぽになったからまた詰め込むために戻っている途中だったんだ。」

そのときソリが大きくカーブを切ったのか、ぼくらは片方に押しつけられました。

「さあ、着いたぞ」太い声がしました。

ぼくらは袋から顔を出しました。ぼくらを乗せたソリは大きな十字架が立った白い建物の近くに止まっています。雪がまだ少し降っています。しかし袋の中はとても温かかったので寒くはありませんでした。

「やあ、ナンキン君、気がついたかね、もうだいじょうぶかい」櫓から降りたサンタさんが近づいてきて言いました。

ぼくは目をこすりました。やはりぼくらを助けてくれたのはサンタさんだったのです。しかも昼間宣伝カーに乗っていた人とそっくりです。

「はい、だいじょうぶです。でもおなかがとても空いてて・・・」

「ハハハ、そうか、さあ家の中へ入ろう。たらふく食べさせてあげる。食べたらプレゼントをその袋に詰め込む手伝いをしてくれないかい。その後、君たちの町に連れて行ってあげるから。さあ急いだ急いだ」

「はい！」口々に言って、ぼくらは、空っぽの白い袋を持ったサンタさんの後についていきました。すると立派な角を持ったトナカイが一頭ぼくらのすぐ後ろをついてきました。

「そうだ、ナンキン君、あのバケツを持ってきてくれないか」サンタさんは家の窓の下にある

雪だるまを指さしました。バケツがその頭に傾いてのっています。

「はい」 ぼくはすぐに走ってそのバケツを取りに行きました。

そこでバケツをつかみながら高い窓をのぞいてみると天井からモービルがつるされていました。一番上には銀色の星があり、その下に白い三人の天使、そして天使たちを見上げる二人の羊飼いたち、さらに三匹の羊たち。どれもがゆっくりと動いています。

家の赤レンガのポーチに急ぎ足で行くと、サンタさんがドアを開けているところで、動物の好きなマサはついてきていたトナカイの頭をおそるおそるなでてやっていました。すると、トナカイの鼻がぱっと赤く輝きました。

「さあ、君たち、入った入った」

ぼくらは中に入ってあっと驚きました。目の前にはたくさんのすてきな色とりどりのおもちゃや人形が山のように積み上げられているのです。そしてそれらの上には先ほど窓から見えた天使や羊飼いたちのモービルがドアを開いたとき入って来た風に吹かれて空間を巡り始めました。

暖炉の火がこうこうと燃えています。

「君たち、あのテーブルの上のパンやフルーツを好きなだけ食べなさい。ミルクもまだ温かいはずだ」

「食べたら、急いでとりかかっておくれ」サンタさんは家の中のロウソク一つ一つに火をともしていきながら言いました。「そこの丸いテーブルとあの赤いじゅうたんの上のプレゼントを入れておくれ、まちがわないでな。」

ぼくたちはすぐにパンをほおぼって温かいミルクもぐっと飲むと仕事にとりかかりました。

どれも素敵なプレゼントばかりです。ポンポン袋の中に放り込んでいきます。不思議なことにいくら詰めても一杯になりません。中でプレゼントがちぢんでいるようでした。

しばらくするとサンタさんもぼくたちと一緒にプレゼントを袋に詰め始めました。

「サンタさん、こんなにたくさんいったいどこから持ってくるんですか？」ぼくは大きな白と黒色の犬のぬいぐるみを袋に押し込みながらたずねました。

「それはもちろん全部神様からのプレゼントさ。きみたちはクリスマスが何の日か知ってるかな？」

「うん知ってます。クリスマスはサンタクロースさんがトナカイのソリに乗ってプレゼントを運んでくる日でしょ。ぼくたちみんなよく知ってるよ」マサが得意になって言いました。

「だからクリスマスはサンタクロースさんの日なんでしょ？」

「アッハッハッハッ」 ぼくが言い終らないうちにサンタさんは笑いだしました。「ハッハッハッ、そうかそうか、君たちはクリスマスはわしの日だと思っているんだね、ハッハッハッ」

「ちがうんですか、サンタさん？」 ぼくたちはサンタさんの楽しくてたまらないというような笑い顔をあっけにとられて見ながら言いました。

「君たちは大切なことを知っていないみたいだね。クリスマスは私の日じゃない。君たち、もちろんイエスキリストという人のことは聞いたことがあるだろう？」

「うん、聞いたことあるよ。でもクリスマスと関係あるの？」

ぼくは、小さい頃母に読んでもらったことのあるイエスキリストの絵本に描かれていた人を思い浮かべていた。「ほら見なさい、足があるから私は幽霊ではないのだよ」というような場面の絵である。

「あるとも、おおありさ、イエスさまの誕生日がクリスマスなんだからね。神様の子イエスが、ベツレヘムという町のある馬小屋の中でオギヤーと元気な赤ちゃんとして生まれたんだよ。そしてそれが一番初めのクリスマスなんだよ。」

「マリア様がそのお母さんだったんでしょ」ぼくが聞いた。

「そうだよ。この赤ちゃんは神様が私たちみんなにくださったすばらしいプレゼント、最初のクリスマスプレゼントだったのだよ。それで神様は世界のよい子にこの日にプレゼントしようと思いつかれたんだ。それでわたしとトナカイたちに命じられてクリスマスイブにはプレゼントを世界中のよい子に届けるようにってことになったのさ、ハッハッハ」サンタさんは白いふっくらとしたヒゲふるえさせて笑いました。家の外では、まるでサンタさんの笑いがうつったかのようにトナカイたちも「クークークー」と鳴きました。

「へえー知らなかったなあ」マサが言った。

「そうだよ、だからプレゼントをもらったら神様とイエス様にも感謝しないといけないよ。」

「でもどうしてイエス様は神様からのプレゼントなんですか」ぼくがたずねた。

「それはイエス様が人々にたくさんのすばらしい秘密を打ち明けてくださったからなのだよ。たとえばどうしたら幸せになれるかとか、どうしたら強い人になれるかとか」

「どうしたら強い人になれると言ったんですか」マサはじゅうたんはしっこの上に最後に残っていた色とりどりのきれいな鉛筆セットと童話の絵本を持ってきて袋に入れながら聞いた。

サンタはしばらくマサを見つめそれからぼくを見つめた。そしてほほえんで言った。「どんなに嫌いな人でも好きになりなさいと言われたのだよ。殴られたりひどい目にあっても殴り返した

り仕返しをしないで我慢し、その人にいつも親切にしてあげなさいとね。」

僕はこれはとても難しいことだと思った。

「それはとても難しいことだけど、イエス様はそれを自分で実行されたんだ。彼は命をかけて人々のためにまだだれも歩めなかったその愛の道を歩まれたんだ。彼は私たちが愛されているから私たちがその道に導いてくださるのだよ。そして今でもだれも迷子にならないようその道を明るく照らして下さっているんだ。そうだ君たちはきょう山で迷子になった。しかし月が君たちの行く道を照らしてくれていたから何とかここまで来れた。それと同じようにイエス様も私たちが人生の道で迷子になってしまわないように正しい道を照らしてくれている光なのだよ。だからすばらしいプレゼントじゃないかね」

「だけどその道から迷子になってしまったらどうなるの？」 マサが聞いた。

「迷子になってもイエス様は君たちを必ず見つけて連れ戻してく下さるのだよ。彼はこう言っている。百匹の羊がいて、一匹の子羊が迷子になってしまったら、他の九十九匹の羊たちを放っておいてでも私はその一匹を見つけて連れ戻すために全力を尽くす。」

「迷子にならないためにはどうすればいいんですか？」 ぼくが聞いた。

「イエス様が神様からのプレゼントだったように、君たちも神様からのプレゼントになることだ。君らを必要とするような人々に贈られるプレゼントにね。この人に会えただけでも生まれてきてよかった、と思ってもらえるような人になることだね。」

ぼくはこれもまたとても難しいことだと思った。

「おお、もう全部入ったね。さあ出かけるぞ。」

ぼくたちはサンタさんが重いプレゼントの袋をかつぐのをてつだってそのまま後からそれをささえながら暖かい家から寒い外に出ていきました。

トナカイたちは今か今かと待っていたようで、ぼくたちが出てくるとうれしそうにソリを引っ張って近づいてきました。雪はもうやんでいました。

「さあまた出発だぞ。みんながんばって走ってくれよ」サンタさんは袋を後の荷台に置くと一頭ずつトナカイの頭をなでてまわりました。

「さあ乗りたまえ、君たち。そうさ前の席だ。特等席ってわけさ、ハッハッハッ」

ぼくはサンタさんの左、マサはサンタさんの右にすわりました。

「さあ、神様のおつかいしゅっぱーつ」サンタさんはほがらかな声で言ってムチをふりました。するとトナカイたちは、待ってましたとばかり走りだしました。

シャン シャン シャン 銀色の鈴が軽やかに鳴り響きます。

ぼくたちを乗せたソリは雪の上をすべって森の道を行きます。道のわきのモミの木にはどれもロウソクがともされ、きれいな飾りがついています。

「ほら、あそこの建物が森の教会だ。クリスマスイブにはようせいたちはみんなあそこに集まって賛美歌を歌ってイエスさまの誕生を祝うんだ。おやメリークリスマス！クリスマスツリーのようせいさん。あんたも今夜はいそがしいんだね」

見ると、ぼくたちがこの森で見つけた小さなようせいがモミの木にキラキラ光る十字架の飾りをつけていました。

「メリークリスマス。サンタじいさん。おじいさんも大変ですね。気を付けて行ってらしてね。お仕事が済んだらパーティに来てください」

「うん、ありがとう。でもわしゃこの仕事が済んだら、七福神さんたちに招待されてて宝船に乗せてもらいそこで年を越すことになってるんだ」サンタさんはふりむいて言いました。ぼくたちもぐるりとふりむいて手をふりました。

シャン シャン シャン シャン

ソリはどんどん走っていきます。ようせいたちに途中で出会うとみんなほがらかな声でメリークリスマスとあいさつをしました。

ぼくたちも声をそろえてメリークリスマスとあいさつを送りました。すると不思議に心の中がうきうきしてよろこびがこみあげてくるのでした。

メリークリスマス！メリークリスマス！

ぼくたちは三人ともうれしくなってジングルベルの歌を歌いました。

するとトナカイたちはビュンビュンとスピードを上げてとぼしはじめました。そしてあっというまにソリは夜空に舞い上がりました。

「わーすごいすごい、まるで飛行機みたいだ」ぼくたちは口々に言いました。

「見て、下は真っ白だ。きれいだね、サンタさん」ぼくはソリのいすにしっかりとしがみついておそるおそる下の方をのぞきました。

「ほら、あそこにピーターパンたちが飛んでくるよ。みんなあの森の教会に集まってるんだよ」サンタさんが右の方を指差して言いました。

「メリークリスマス！」ぼくたちは大きな声であいさつしました。

「メリークリスマス！」ピーターパンたちはぼくたちに手を降りました。

「ごくろうさま、サンタクロースさん」いつのまにかいたずらようせいティンカーベルが赤鼻のトナカイの角の上にすわっています。

「やあティンカーベルまた来たね。元気だったかい？そうか、そうか。でも元気すぎてまた教会でいたずらするんじゃないかならうね、ハッハッハッ」

ティンカーベルはクスクス笑いながらピーターパンたちの方に戻っていきました。

「そろもういたずらだ。ハッハッハッ」

見るとティンカーベルのすわっていた角に赤いリボンが結ばれていて風にひらひらとしています。

つけられたトナカイはとても恥ずかしそうに頭を振ってふり落とそうとしていますが、とても取れそうにありません。

「さあ、もうすぐきみたちの住んでいる町の上だぞ。ほらあの建物みおぼえがあるだろう？」

「アッぼくたちの学校だ。わーいグラウンドがあんなに真っ白になってる！」

「ほんとだ、あしたは雪だるまを作ったり、雪合戦ができるぞ、ナンキン」

「さあ着いたぞ。君たちはここでおりて早く家にお帰り。わたしは今夜のうちにプレゼントを全部配らなくてはいけないからとてもいそがしいんだ」サンタさんはソリからおりてトナカイの角から赤いリボンを外してポケットに入れ、白い息をはきながらふくろのところに来て、「ほれ君たちのプレゼントだ」と言ってモミの木を二本ぼくらにくれました。

「サンタクロースさん、どうもありがとう」ぼくたちは帽子を取っておじぎをしました。

「うん。さあ寒いから早くお家に帰りなさい。メリークリスマス、ナンキン君とマサ君」サンタさんはソリに乗ってムチを振って言いました。

「メリークリスマス、サンタのおじいさん」

ソリはあっというまに星空に向かって去っていきます。ぼくたちはその姿が見えなくなるまで見送っていました。すると星空から粉雪がチラチラと落ちてきます。まるで星が降ってきているようだねとマサが言いました。そしてその雪はサンタさんのソリやトナカイたちの足跡の上に落ちていきます。

家につくと不思議なことにまだ6時前でした。冬は日が早く沈むとはいえ、日没からだいぶたっていたと思っていたのがまだ夕食の準備が終わったところでした。それでぼくは急いで、買った時は洗剤が入っていた大きな缶からクリスマスの飾りを出し、サンタさんからもらったモミの木を缶の中に立てて、クリスマスの飾りを妹と弟と一緒につけました。クリスマスツリーの妖精をつけた時それがぼくにウィンクしたように見えたのは気のせいだったのでしょうか。

メリークリスマス

written by Kazuhiro Nagamitsu with Love and Hope 1976

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro

